

10/9 Sat.

第241回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.241 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/10 Sun.

第241回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.241 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

シベリウス
SIBELIUS

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

シベリウス
SIBELIUS

沖澤のどか *-p.6*
NODOKA OKISAWA

ペーター・レーゼ *-p.9*
PETER RÖSEL

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

交響詩〈フィンランディア〉作品26 [約8分] *-p.12*
Finlandia, op. 26

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15 [約36分] *-p.13*
Piano Concerto No. 1 in C major, op. 15
I. Allegro con brio
II. Largo
III. Rondo : Allegro

交響曲 第2番 二長調 作品43 [約43分] *-p.14*
Symphony No. 2 in D major, op. 43
I. Allegretto
II. Tempo andante, ma rubato
III. Vivacissimo – IV. Finale : Allegro moderato

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

10/15 Fri.

第646回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.646 / Suntory Hall 19:00

10/18 Mon.

非破壊検査 Presents 第30回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.30, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮
Special Guest Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

スメタナ
SMETANA

[休憩]
[Intermission]

小林研一郎 (特別客演指揮者) *-p.7*
KEN-ICHIRO KOBAYASHI
長原幸太
KOTA NAGAHARA

連作交響詩〈我が祖国〉
[前半:約40分、後半:約45分] *-p.15*
My Fatherland
I. ヴィシェフアド(高い城)
II. ヴルタヴァ(モルダウ)
III. シャールカ

IV. ボヘミアの森と草原から
V. ターボル
VI. プラニーク

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：非破壊検査株式会社 (10/18)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 (10/15)
協力：コジマ・コンサートマネジメント (10/18)

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

10/22 Fri.

第3回 川崎マチネーシリーズ
ミューザ川崎シンフォニーホール 14時開演
KAWASAKI MATINÉE SERIES No.3 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.7
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

服部百音 -p.9
MONÉ HATTORI

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] -p.18
Violin Concerto in D major, op. 35
I. Allegro moderato – Moderato assai
II. Canzonetta : Andante
– III. Finale: Allegro vivacissimo

交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] -p.19
Symphony No. 5 in E minor, op. 64
I. Andante – Allegro con anima
II. Andante cantabile, con alcuna licenza
III. Valse : Allegro moderato
IV. Finale : Andante maestoso – Allegro vivace

10/29 Fri.

第612回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.612 / Suntory Hall 19:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ライマン
REIMANN

アデス
ADES

[休憩]
[Intermission]

シューベルト
SCHUBERT

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.8
MASATO SUZUKI

ジャン・チャクムル -p.10
CAN ÇAKMUR
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

シューベルトのメヌエットによる
メタモルフォーゼン (日本初演) [約8分] -p.20
Metamorphosen on a Minuet of Franz Schubert (Japan premiere)

イン・セブン・デイズ (日本初演) [約30分] -p.21
In Seven Days (Japan premiere)
I. 混沌 – 光 – 闇
II. 水を大空と海とに分ける
III. 地 – 草 – 木
IV. 星 – 日 – 月
V. フーガ : 海と大空の生き物
VI. フーガ : 地の生き物
VII. 観想

交響曲 第8番 ハ長調 D944 〈グレート〉
[約48分] -p.22
Symphony No.8 in C major, D944 "The Great"
I. Andante – Allegro ma non troppo
II. Andante con moto
III. Scherzo : Allegro vivace
IV. Allegro vivace

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：ミューザ川崎シンフォニーホール (川崎市文化財団グループ)

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
令和3年度 (第76回) 文化庁芸術祭参加公演
※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

10/9
土曜マチネー

10/10
日曜マチネー

Maestro

指揮

沖澤のどか

NODOKA OKISAWA, Conductor

ブザンソン制覇の新鋭 読響初登場



©Felix Broede

2019年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝し、国際的に注目を浴びる新鋭が読響に初登場。瑞々しい感性としなやかなタクトで、シベリウスの人気作品を豊かに響かせる。

青森県生まれ。幼少期からピアノ、チェロ、オーボエを学ぶ。東京芸術大学および同大学院修士課程修了。その後、ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン修士課程修了。第18回東京国際音楽コンクール〔指揮〕にて第1位および特別賞、齋藤秀雄賞を受賞したほか、第7回ルーマニア国際指揮者コンクールにて第3位入賞。2020/21シーズンより、ベルリン・フィルのカラヤン・アカデミーの奨学金取得者として、首席指揮者であるキリル・ペトレンコのコンサートとオペラのアシスタントを務めている。指揮を田中良和、松尾葉子、高関健、尾高忠明、C. エーヴァルト、H. D. バウム、M. ナヴリに師事。井上道義、下野竜也、N. ヤルヴィ、P. ヤルヴィ、K. マズアらのマスタークラスを受講したほか、11～12年にはオーケストラ・アンサンブル金沢の指揮研究員を務めた。また、19年には東京・春・音楽祭において、ムーティによるイタリア・オペラ・アカデミーに選拔された。

これまでに、ベルリン・コンツェルトハウス管、ザールブリュッケン・カイザーラウテルン・ドイツ放送フィル、オランダ放送響、ジョルジュ・エネスコ・フィル、マグデブルク・フィル、N響、東京都響など、国内外の多くの楽団を指揮している。オペラ分野でも活動を広げており、20年には東京二期会オペラ〈メリー・ウィドウ〉を指揮し好評を博した。ベルリン在住。

指揮

小林研一郎

(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

円熟のタクトが描く 郷愁の〈我が祖国〉



©山本倫子

熱い音楽作りで絶大な人気を誇る“炎のマエストロ”。81歳を迎えます円熟味を深める世界的指揮者が、^{おはこ}十八番とするスメタナの大作〈我が祖国〉とチャイコフスキーの傑作を情感たっぷりに歌い上げる。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポストを歴任している。2002年5月の「ブラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれて〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして20年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を授与された。国内では11年に文化庁長官表彰受賞、13年に旭日中綬章を受章、21年3月に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、群馬響ミュージック・アドバイザー、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授の任にあるほか、長野県芸術監督団の音楽監督、ロームミュージックファンデーションの評議員を務めている。録音では、14年4月から読響と取り組んだブラームスの交響曲全集が好評を博す。

10/15
名曲

10/18
大阪定期

10/22
川崎マチネー

Maestro

10/29
定期

Maestro

指揮

鈴木優人

(指揮者／クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner

新時代のホープが振る 現代作品&〈グレート〉



©読響

マルチな才能とあふれるセンスで時代を切り拓く、日本が誇る次世代の旗手。二つの異なる作風の現代作品と、シューベルト〈グレート〉を組み合わせた刺激的なプログラムを、鮮烈なタクトで描く。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJとは15年にバッハ〈マタイ受難曲〉、17年にモンテヴェルディの歌劇〈ポッペアの戴冠〉を指揮して絶賛され、昨秋にはヘンデルの歌劇〈リナルド〉を上演し注目を浴びた。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演している。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、多岐にわたり活動している。NHK-FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。ホテル・オークラ音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。20年4月に読響の指揮者／クリエイティブ・パートナーに就任。コロナ禍による活動中止後の再開最初の演奏会や20年11月の《第603回定期演奏会》《第27回読響アンサンブル・シリーズ》などでの活躍が評価され、21年3月に第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。



ピアノ

ペーター・レーゼル

PETER RÖSEL, Piano

ドイツ・ピアノリズムの伝統を今に伝える世界的巨匠。1945年ドレスデン生まれ。モスクワ音楽院でバシキーロフとオポーリンに師事。チャイコフスキー国際コンクールにドイツ人として初めての入賞を果たした。これまでにコンドラシン、テンシュテット、スウィトナー、ハイティンク、K. マズア、K. ザンデルリンク、テミルカーノフらの指揮で、ベルリン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ニューヨーク・フィルなど世界の著名な楽団と共演。ザルツブルク、ラ・ロック・ダンテロン、ドレスデンなど国際的な音楽祭でも活躍している。2009年にはドレスデン市芸術賞を受賞。EMI、キングレコードなどから多くの録音をリリースし、高い評価を得ている。今回で、惜しまれつつも日本での公演活動に終止符を打つ。

才気あふれる演奏で注目を浴びる新星ヴァイオリニスト。東京生まれ。2009年リピンスキ・ヴィエニャフスキ国際コンクール・ジュニア部門に史上最年少で優勝したほか、新日鉄住金音楽賞、ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。10歳から演奏活動を始め、ティチャーティ指揮ベルリン・ドイツ響、N響、東響などと共演。アシュケナージとスイス、イタリアで共演するなど活躍の場を世界に広げている。本年10月より桐朋学園大学音楽学部大学院に入学。初CDが『レコード芸術』誌の特選盤に選ばれたほか、今年6月新たにCD「リサイタル」をリリース。使用楽器は日本ヴァイオリンより特別貸与のガールネリ・デル・ジェス。読響とは15年に初登場して以来、共演を重ねている。



©Chihoko Ishii

ヴァイオリン

服部百音

MONÉ HATTORI, Violin

10/9
土曜マチネー

10/10
日曜マチネー

Artist

10/22
川崎マチネー

Artist

10/29
定期

Artist



ピアノ

ジャン・チャクムル

CAN ÇAKMUR, Piano

2018年の浜松国際ピアノコンクールに優勝し、注目を浴びる新星ピアニスト。1997年トルコ生まれ。パリのスコラ・カントルムを首席で卒業。現在、ワイマール音楽大学で研鑽^{けんさん}を積む。ロンドンのウィグモア・ホールをはじめ世界各地で演奏活動を展開するほか、これまでにロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管、ライブツィヒ放送 (MDR) 響、札幌響、東響、京都市響、名古屋フィルなどと共演。15年にはイスタンブール音楽祭の開幕コンサートで、ゲッツェル指揮ボルサン・イスタンブール・フィルと共演し、絶賛された。20年秋にBISレコードから発売された最新CD「シューベルト／リスト：白鳥の歌」は、21年1月にICMA（国際クラシック音楽賞）でヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤーを受賞。今回が読響初登場。

10/9

土曜マチネー

10/10

日曜マチネー

Program Notes

シベリウス

交響詩〈フィンランディア〉 作品26

フィンランドの国民的作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）を代表する管弦楽曲。フィンランドは1809年以降ロシアの支配下に入り、1899年に入ると、時のロシア皇帝ニコライ2世が議会の廃止や言論の圧迫によって属領化を推進した。そこで同国では愛国運動が盛り上がり、99年11月、その一環として新聞関係者による年金基金のための行事が開催された。行事では歴史劇『歴史的情景』の上演も企画され、付随音楽をシベリウスが担当。彼は序曲と六つの場面の音楽を作曲した。この『歴史的情景』の最終場面にあたる〈フィンランドの目覚め〉の音楽を改訂したのが、交響詩〈フィンランディア〉である。

本作は、1900年のパリ万国博覧会に参加するヘルシンキ・フィルの演目として企画され、同年7月、ヘルシンキにおけるパリ万博参加記念コンサートで初演された。ただしパリでは、ロシアとの関係から愛国的なタイトルを使用できず、〈祖国〉に変更されている。そして本作は、国民の士気を大いに鼓舞し、独立運動の象徴的存在となった。さらに独立後の1938年、詩人ヴェイッコ・コスケンニエミが中間部の旋律に歌詞を付けて、〈フィンランディア賛歌〉と題した合唱曲に改編。これも支持を集め、第二の国歌的な音楽となった。

曲は、金管楽器を効果的に用いた迫力あるサウンドと迫真の展開を特徴としている。苦難を思わせる重い序奏に続いて、闘いを呼びかけるような力強い音型が登場。苦しみ^{こと}に立ち向かうが如く進行し、勝利を呼び覚ます躍動的な旋律も加わる。中間部で〈フィンランディア賛歌〉となった旋律が美しく奏された後、激しさが戻って前半の音楽が再現され、高らかなクライマックスに至る。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1899年（原曲）、1900年（交響詩）／初演：1899年11月4日、ヘルシンキ（原曲） 1900年7月2日、ヘルシンキ（交響詩）／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第1番 八長調 作品15

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、1792年に生地ボンからウィーンへ移り、まずはピアニストとして名を広めた。そして華やかな上にピアノと作曲の腕前を同時に発揮できるピアノ協奏曲の創作に力を注ぎ、貴族など有力者へのアピールを策した。そこで生み出されたのが、第1番と第2番の両協奏曲である。

2曲の創作過程は複雑で、研究者の見解に移ろいがあったが、現在、第1番に関しては「1793年に作曲が開始され、1795年に第1稿が完成。同年3月ブルク劇場における慈善演奏会にて、ベートーヴェン自身の独奏、サリエリの指揮で初演された。だが、その後も改訂がなされ、1800年に決定稿が完成された」との見方が有力視されている。1795年3月の演奏会はベートーヴェンの公的な（一般の劇場での）ウィーン・デビューとされているので、本作は大家への第一歩をしるした記念すべき1曲ということになる。

曲は、明朗でチャミングな旋律と若々しい躍動感が特徴。モーツァルトを継承する古典的な協奏曲の形式と内容ではあるものの、ベートーヴェン自身「大協奏曲」と称したように、全編を包むシンフォニックな響きが早くも彼の個性を表している。また、第2楽章の変イ長調という調性は、八長調の曲としては珍しい選択で、これも新たな創意といえるだろう。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 堂々とした第1主題と流麗な第2主題を軸に進行する、明るく爽やかな楽章。終盤のカデンツァはベートーヴェンの自作が3種類残されている。

第2楽章 ラルゴ なごやかで美しい緩徐^{かんじょ}楽章。詩的な趣が漂う主部に、幻想的な中間部が挟まれる。

第3楽章 ロンド、アレグロ ピアノによる軽快な主要主題で始まる、快活で楽しいフィナーレ。再三登場する主要主題部の合間に、二つの副主題部が挟まれる。中でも、短調に変わる二つ目の副主題部がすこぶる印象的だ。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1793～95年／初演：1795年3月29日、ウィーン／演奏時間：約36分
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

10/9

土曜マチネー

10/10

日曜マチネー

Program Notes

10/9

土曜マチネー

10/10

日曜マチネー

Program Notes

シベリウス

交響曲 第2番 二長調 作品43

シベリウスは1904年、田舎の村ヤルヴェンパーへ引っ越したのを機に、透明感漂う簡潔な方向へ作風を変化させた。本交響曲はその少し前の、ロマンティックなテイストを残していた時期に書かれた作品。番号で呼ばれる七つの交響曲中、最もポピュラーな存在であり、北欧の同ジャンルを代表する1曲でもある。

1901年、シベリウスは家族と共にイタリアに旅行した。本作は、この際に地中海沿岸の景勝地ラパッロ等で着想した音楽を取り入れながら、夏から年末にかけて作曲され、翌1902年初頭に完成。同年3月、作曲者の指揮で初演され、大成功を収めた。

曲は伝統的な交響曲の形をとりながらも、交響詩や幻想曲の要素が強い音楽。イタリアでインスピレーションを得たドン・ファン伝説やキリストにちなむ楽想が第2楽章に反映されたといわれているものの、全体を支配するのはやはり北欧の自然を想起させる空気感である。また、第3楽章の最後を高潮させて第4楽章になだれ込む手法はベートーヴェンの〈運命〉交響曲を彷彿させ、第4楽章の息の長い盛り上がりは聴く者の気分をいやが上にも高揚させる。

第1楽章 アレグレット 民謡風の第1主題と、音を長く伸ばして最後だけ細かく動く第2主題を中心に運ばれる、幻想曲風の音楽。

第2楽章 テンポ・アンダンテ、マ・ルバート 低音弦楽器のピッツィカートに乗って奏される寂しい第1主題と、優美な第2主題を軸に進み、途中でクライマックスが築かれる。

第3楽章 ヴィヴァチッシモ スケルツォにあたる楽章。荒々しい主部に、オーボエがしみじみと歌う中間部が対比され、盛り上がりの頂点で終楽章へ移る。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・モデラート 冒頭の力強く幅広い第1主題と、悲しげな第2主題が対照されながら進行。果てしない高揚を遂げ、明るく高らかな終結に至る。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1901～02年／初演：1902年3月8日、ヘルシンキ／演奏時間：約43分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

スメタナ

連作交響詩〈我が祖国〉

「いつの日か技巧ではリストのように、作曲ではモーツァルトのようにになりたい」。リストの演奏に魅せられた若き日のペドルジフ・スメタナ（1824～84）は、1845年の日記にこう書いている。後にチェコ国民楽派の創始者となるスメタナだが、キャリアの出発点ではピアノの名手を志していた。だが、代表作である連作交響詩〈我が祖国〉によって、むしろ作曲家としてリストの衣鉢を継いだともいえるだろう。作品1となる〈6つの性格的小品〉をリストに献呈したスメタナは、ワイマールのリストを訪れて〈ファウスト交響曲〉の初演を聴くなど、交友を深めてゆく。そして標題音楽というリストの考えに触発され、最初の交響詩〈リチャード3世〉を作曲した。祖国での民族主義の高まりを受けて、スメタナは歌劇〈売られた花嫁〉をはじめとする国民オペラの創作に精力を傾けるが、やがて交響詩の分野でも民族復興の精神を表現できると考え、祖国の伝説や歴史、自然を題材とした連作交響詩を構想する。そして1874年に第1曲となる「ヴィシェフラド」を書きあげると、以降1曲ずつ書き進められ、5年後の1879年に第6曲「ブラニーク」が完成し、全6曲からなる記念碑的大作〈我が祖国〉が誕生することとなった。

第1曲「ヴィシェフラド」 曲名はヴルタヴァ（モルダウ）川の河畔にそそり立つ丘の城跡を指し、「高い城」を意味する。10世紀後半にこの地に城が築かれ、長くブラハ南部の要塞として整備されてきたが、15世紀のフス戦争（キリスト教改革派フス派とカトリックの戦い）により城は破壊された。スメタナはいにしへのヴィシェフラド城に思いを馳せ、王家の輝かしい栄光と衰退を音楽で綴る。曲はハーブ2台のカデンツァにより開始される。竖琴を手にするミンストレル（吟遊詩人）がこれから歴史を回想する、といった趣向だ。同じ主題がホルン、さらに木管楽器群に受け継がれ、厳かな雰囲気（^{かも}醸し出す。以降、この主題は〈我が祖国〉全曲にわたって形を変えながら登場する。続くアレグロでは切迫感のある楽想が繰り広げられ、戦闘の場面が描かれる。いったんは勝利を収めるが、すぐに城は陥落し、ゆるやかな哀歌が奏でられ、冒頭のハーブの主題が回帰する。

第2曲「ヴルタヴァ」（モルダウ） 全6曲中、もっともよく知られるのがこの曲であり、単独で演奏される機会も多い。ヴルタヴァはブラハ市街を流れる川の名で、

10/15

名曲

10/18

大阪定期

Program Notes

10/15
名曲10/18
大阪定期

Program Notes

ドイツ語名は「モルダウ」。ふたつの水源から流れ出した川が合流してひとつとなる様子が描写される。冒頭でフルートが第一の源流を表現する。続いてクラリネットが第二の源流が登場する。ふたつの源流は重なり合い、小さな川の流れが次第に勢いを増し、川幅を広げてゆく。哀愁を帯びた有名な民謡風主題は、とうとうたる川の流れを思わせる。川は森を抜け、村を通る。ホルンを中心とする金管楽器群が狩りを連想させると、続いて歯切れのよいリズムで結婚式の村人たちの踊りが表現される。やがて幻想的な曲想に変わり、月明かりのもとで水の精が踊り出す。民謡風主題が回帰し、急流を経て、クライマックスを築く。最後にヴィシェフラドの主題が姿を見せ、川は視界から遠ざかる。

第3曲「シャールカ」 シャールカとはチェコの伝説に登場する女傑の名前。物語の背景には男たちと女戦士たちの対決がある。曲は荒々しく開始され、シャールカの気性の激しさを予告する。行進曲とともに英雄ツチラト率いる男たちの兵がやってくる。シャールカは仲間に自分の体を木に縛り付けさせて、通りかかったツチラトに助けてほしいと懇願する。優美なクラリネットがシャールカを表現し、チェロでツチラトが応答する。ツチラトはシャールカの縄をほどき、愛の音楽が続く。だが、これは罠なのだ。兵士たちに酒をふるまわれ、宴の音楽でひとしきり盛り上がると、酔った男たちのいびきがファゴットで模される。シャールカは角笛のホルンをひと吹きして、味方たちを呼ぶ。クラリネットのシャールカが一瞬悲しげな表情を浮かべる。勇壮な終結部は、女戦士たちが男たちを皆殺しにする場面だ。

第4曲「ボヘミアの森と草原から」 第2曲「ヴルタヴァ」と同様、具体的な物語を持たない自然賛歌の音楽。作曲者によれば、ボヘミアの風景から喚起される感情が描かれており、だれもがこの曲から自分にとって好ましい思い出を引き出すことができるという。波打つような冒頭部分は風になびく草原のよう。風が静まると、クラリネットが憂愁を帯びた旋律を奏でる。オーボエとファゴットによる穏やかな牧歌が続く、これにフルートが華やぎをもたらす。弱音器付きのヴァイオリンによって始まるフーガは森のざわめきを連想させる。管楽器によるゆったりとした賛歌が重なり合い、広大な森を描く。そこに突如として差し挟まれる陽気な農民舞曲。

森の音楽と楽しげな舞曲を交替させながら曲は進み、最後は嵐のような熱狂のなかで曲を閉じる。

第5曲「ターボル」 ターボルとはボヘミア南部に位置する古都の名。フス戦争ではキリスト教改革派であるフス派の重要拠点となった。引きずるようなリズムの反復から、重々しい強奏によりフス派のコラール「汝ら神の戦士らよ」が姿を現す。スメタナによれば、この曲ではフス教徒たちの意志の力、闘争心、勇敢さ、忍耐力が表現されている。コラールをもとにした荘厳で決然とした曲想が続いた後、激しい戦闘の音楽が始まる。戦いは次第に白熱し、その頂点で高らかにコラールが奏でられる。しかし、フス派に訪れたのは勝利ではなく敗北なのだ。フス派は不屈の精神と勇猛果敢さを失うことなく、ブラニークの山奥に隠れる。

第6曲「ブラニーク」 前曲を受け継いで、^{いか}厳めしいフス派のコラールが響き渡る。ブラニークは中央ボヘミアの山の名。伝説によれば、祖国が危機を迎えたとき、山に眠る戦士たちがよみがえるという。山奥に隠れた戦士たちはじっと時が来るのを待っている。しばらくすると、オーボエの甘美な旋律が聞こえてくる。羊飼いの笛の音だ。穏やかな休息が訪れるが、平安は長くは続かない。不穏な気配が漂い、三連符の連続が焦燥感を高める。戦士たちは行進し、戦いへと赴く。コラールを交えながら壮大な凱歌が奏でられる。終結部では荘厳なコラールに続いて「ヴィシェフラド」の主題が強奏され、大いなる喜びとともに全曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1874～79年／初演：1882年11月5日、プラハ（連作交響詩として）／演奏時間：前半3曲 約40分、後半3曲 約45分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル）、ハープ2、弦五部

10/15
名曲10/18
大阪定期

Program Notes

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と共に当ジャンルの代表作となっている。

1878年春、前年の結婚破綻による神経衰弱をスイスのレマン湖畔のクラランで癒していたチャイコフスキーは、若手ヴァイオリニスト、コテークに紹介されたラロの〈スペイン交響曲〉（内容は華麗なヴァイオリン協奏曲）に刺激を受けて構想が湧き上がり、わずか1か月ほどで本作を完成させた。そしてロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまう。しかし、ロシアのドイツ系奏者アドルフ・ブロツキーの尽力により、3年後の1881年12月にウィーンでの初演が実現。当地の大批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されたものの、ブロツキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、ついにはアウアーも進んで演奏するようになった。

曲は、情熱と哀愁に満ちた聴き応え満点の音楽。協奏曲としては民俗的な情緒が際立ち、チャイコフスキーならではの旋律美も魅力をなしている。重音その他ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ のびやかでスケールの大きな第1主題と叙情的な第2主題を軸に、華やかさと哀感が交錯しながら進行。技巧的なソロが縦横に展開される。

第2楽章 カンツォネッタ：アンダンテ 愁い^{かんじょ}をたたえたト短調の緩徐楽章。弱音を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わる。切れ目なく次楽章へ。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ヴィヴァチッシモ 躍動的な終曲。ロシアの舞曲トレバック風の歯切れ良い第1主題と、若干テンポを落として奏されるやはり民俗舞曲風の第2主題を軸に、熱狂的な展開を遂げる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー

交響曲 第5番 ホ短調 作品64

交響曲第4番から約10年、国外滞在が多く、創作活動は若干停滞気味だったチャイコフスキーだが、この間に西欧でブラームス、ドヴォルザーク、マーラーらと知り合い、近代的なオーケストラ演奏にも刺激を受けていた。そして1888年、好環境の村に居を構えたのを機に創作意欲が湧き上がり、3か月ほどで本作を完成。初演当初は批評家の評価が低かったものの、西欧を中心に支持を獲得し、ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気作となった。

本作は、チャイコフスキー自身が第1楽章冒頭の旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現したことから、「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命主題」と呼ばれている。主な特徴は、運命主題が“固定楽想”として各楽章に登場する点、第3楽章にワルツを用いている点、暗い運命主題が終楽章では長調に姿を変える点など。これらにはベルリオーズの〈幻想交響曲〉の影響^{うかが}も窺えるが、全体をみれば、チャイコフスキーならではの歌とパッションと迫力にあふれた名曲だ。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ 最初にクラリネットで奏されるのが「運命主題」。主部は、歩むような第1主題とのびやかな第2主題を中心に、ダイナミックな展開を遂げる。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ ホルンのソロで出される主題を中心とした、甘美で陶酔的な緩徐楽章。だが、盛り上がり^{えんぴ}の頂点を運命主題が遮る。

第3楽章 ワルツ：アレグロ・モデラート 艶美なワルツ主部に小刻みな動きの中間部が対比され、最後に登場する運命主題が夢気分を現実^{えんぴ}に引き戻す。

第4楽章 フィナーレ：アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ 長調の運命主題で始まる荘重な序奏から、短調の主部へ移り、荒々しく刻まれる第1主題と木管で出される第2主題を中心に激しく進行。凱旋行進曲のような終結を迎える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ライマン

シューベルトのメヌエットによるメタモルフォーゼン（日本初演）

フランツ・シューベルト（1797～1828）は1813年、数学で赤点を取り、ウィーンの寄宿学校コンヴィクトから放校される。ただ、この成績低迷は、シューベルトの音楽への取り組みが本格化したことによって引き起こされた。青年は一般的な学科よりも作曲のあれこれを学ぶのに時間を取ったのだ。

その成果のひとつが、ピアノのための〈メヌエット〉嬰ハ短調D600である。正確に言うところの曲は、まだ成果にはなりきっていない。学んだことをいったん外部に出力して、今後の発展に生かす。つまり習作だ。

シューベルトのこの習作を、成果として成り立たせようとする試みを、ドイツの作曲家アリベルト・ライマン（1936～）がおこなった。それがこの〈メタモルフォーゼン〉である。タイトルはドイツ語で「変身、変容」（複数形）を表す。

世代によってはライマンを、歌手フィッシャー＝ディースカウの伴奏ピアニストとして記憶する向きもある。作曲家としても歌劇から器楽独奏曲まで、幅広く作品を書いている。

ライマンは〈メヌエット〉を“メタモルフォーゼン”させるにあたり、次のような手段を取った。第1に、独奏ピアノ用を室内管弦楽合奏用へと編成替える。第2に、本歌〈メヌエット〉を切り刻む。第3に、切り刻んだパーツの間に新たに作曲した各部を挿し入れる。シューベルト部分は19世紀初めの、ライマン部分は20世紀末の様式に基づく。

したがって聴き手は、曲の進行に伴いふたつの時代を交互に行ったり来たりすることになる。その対比に耳を傾けるにせよ、類似に着目するにせよ、両者に共通する土台には注意を払いたい。〈メヌエット〉はそもそも、若きシューベルトのポリフォニー学習の証だ。ライマンはその多声性を受け継ぎ、さらには声部の絡み合いと嬰ハ短調なる調とが醸し出す雰囲気、20世紀の方法論でトレースしていく。やがて、どちらともつかぬ姿で曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1997年／初演：1997年12月8日、ケルン／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、弦五部（各1）

アデス

イン・セブン・デイズ（日本初演）

「元始に神天地を創造たまへり」の一文で『聖書』は始まる。ヤハウェによる天地創造の次第。世界でもっとも有名な7日間だ。この「創世記」の記述を下敷きに、トーマス・アデス（1971～）はピアノ、管弦楽と映像のための〈イン・セブン・デイズ〉を作曲した。

アデスはイギリスの作曲家。同国最大の音楽家になぞらえ「パーセルの再来」と呼ぶ向きもある。17世紀のパーセルが、テキストに寄り添った作品（劇付随音楽）に腕を振るったように、アデスもこの作品で「創世記」に音楽的な注釈を加える。

作曲家は天地創造の7日間を次のように理解した。光と闇に関わる第1日と第4日、海と空にまつわる第2日と第5日、大地に根ざした第3日と第6日、そして瞑想する第7日。すなわち第1日から第3日を、第4日から第6日がそれぞれ補完し、第7日が簡潔にその本義を示す。作曲家はこの7日間を7つの楽章として音楽化＝抽象化し、切れ目なく演奏するように設えた。音楽も各日の補完関係を反映する。

興味深いのはアデスが第5日と第6日、つまり海と空と大地に生き物があふれ出す場面を、フーガのスタイルで表現していることだ。本邦の雅楽でも舞人の登場の音楽として、カノン風の「追吹」がある。何かの立ち現れるさまを示すのに適した方法なのだろう。第7日は4分の7拍子で、小節内の下行する7つの音は7日を指していよう。最後の楽句を聴くと、作品の冒頭に戻ったような気にさせられる。

この作品にはピアノ独奏があるので協奏曲と言ってもよいが、その独奏は派手な隈取というよりも、響きの肌理を調える化粧下地のように働く。ピアノが管弦打楽器とともに繰り広げる音楽は、21世紀の聴き手には耳馴染みのようであり、なぜかつねに、定型からはずるりと逃げていってしまう。これはテキストと音楽というメディア間の「翻訳しきれなさ」を、当の音楽を使って表しているとも言える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2008年／初演：2008年4月28日、ロンドン／演奏時間：約30分 楽器編成／フルート3（アルトフルート、ピッコロ持替）、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、クラベス、ボンゴ、カバサ、ゴング、銅鑼、トムトム、クロテイル、鐘、ブラッテン・グロッケン、ハンドベル、ヴィブラフォン、グロッケンシュピール）、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト

交響曲 第8番 八長調 D944 〈グレイト〉

1825年の初夏から晩秋にかけて、シューベルトは長い旅をした。5月にウィーンを出発、ザルツブルクを目指す行程だが、夏の盛りはグムンデンに2か月、ガスタインに1か月、長逗留した。旅先でリラックスしたせいか、創作の筆も滑らかだった。友人オッテンヴァルトによると、シューベルトは「何曲かリートを作曲し（中略）それから、グムンデンで交響曲を1曲、書いた」という。

ところがこの作品は以後、こつぜんと姿を消す。見つかったのは、作曲家が世を去って10年ほど過ぎたころ。発見者はロベルト・シューマンだ。シューマンは1839年1月1日、ウィーンにシューベルトの墓を詣でた足で、その兄フェルディナントを訪ねた。そこで未出版の八長調交響曲を見出し、すぐさま盟友フェリックス・メンデルスゾーンに楽譜を送る。メンデルスゾーンは同年3月21日、ゲヴァントハウス管弦楽団を指揮して同曲を初演。こうして、長らく忘れられていた大作が、その姿を現すこととなった。

第1楽章冒頭から第8小節までに、交響曲全体を形作るおおむねすべての韻律（リズム要素）、すなわち「長短短（タータタ）」「長短長（タータター）」「短短短長（タタタター）」が姿を現す。

第2楽章の主題は、前楽章序奏のテーマに見る「長短短」の変奏。以下、大きく二つの部分が交互にABABAと続いていく。

第3楽章がすこぶる長く感じるのは、繰り返しが多いせいもあるが、むしろ第1楽章に由来する韻律を、あの手この手で何度も使うからでもある。

第4楽章冒頭のリズムも第1楽章序奏の韻律を転用したものだ。この交響曲は作品が進むほど、第1楽章の韻律が濃縮していく仕組みになっている。実際の時間に比べて、音楽的な時間が濃密かつ長大に感じられるのは、そのせいだ。シューマンはこの作品を「天国的な長さ」と評した。それはまさに、この仕組みを感知した同業者による、美しい比喩だった。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1825年／初演：1839年3月21日、ライプツィヒ／演奏時間：約48分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部